

会に参加する例は、サッカーなどを除き、まだ稀だ。たとえば高校生を対象にした野球の地域スポーツクラブが発足しても、いわゆる甲子園大会に参加するのはほとんど不可能。これは、今後さらに少子化が進むことを考えた場合、才能のある子供を育てる場を失い、大切な芽を摘むことにつながってしまう。

こうした問題をみてみると、「学校部活」「地域スポーツクラブ」「プロスポーツ」の三者の役割分担と連携を考える必然性を強く感じる。おそらくそれは、今回の法改正の焦点のひとつであることは間違いないだろう。ただ、三者の連携を考えてみると、今度は別の問題も透けてみえてくる。競技団体の構造的な問題である。たとえば学校部活も地域スポーツクラブも同一の大会で戦えるようになるには、競技団体の協力が不可欠だ。しかし、正直、このハードルは相当高いと推測する。アマチュア・プロ問わず、残念ながら旧態依然とした競技団体が多いのが現実だ。一部の人々が新しい改革を試みたバスケは、結果として二つのリーグを抱えることになってしまった。また、昨年、新弟子試験にひとりの子も来なかった大相撲も、世間を騒がす問題が頻発している。競技団体の旧態依然とした考え方や体質を考えると、競技の将来が危ぶまれる。

これらの団体に共通しているのは、トップの高齢化と組織の風通しの悪さ。現場でプレイする選手や、選手を育て現場を盛りたてている指導者が運営の中心にいないケースが多い。スポーツは本来、選手とともに現場で走りまわっている指導者が協会の運営を主体的に担っていくべきではないだろうか。競技団体のガバナンス問題は、今始まったことでもない。ひとつの競技に限ったことでもない。スポーツ全体にガバナリティが欠如している現状をスポーツ界全体が真摯に受け止め、改善していくべきではないだろうか。

今後、総合型地域スポーツクラブの存在が重要になってくることは先に述べたが、ここにも当然課題はある。理念が先行し、クラブマネジメントという視点に欠けるクラブも多いのだ。スポーツクラブ経営をソーシャルビジネスとして成り立たせるためには、マネジメント力やプロデュース力に必要になってくるだろう。優秀な人材が各クラブに必要なようになってくる。戦後の日本は、本来、国や地方自治体、社会がやるべき役割を企業に押し付けてきた。それはスポーツでも同じだ。経済が右肩上がりの時代はうまくいったかもしれないが、今後は難しい。

しかし、社会にとってスポーツの存在は必要不可欠。バブリーなものとしてクラブマネジメントを位置づけたうえで、スポーツクラブの社会的地位の向上、運営にあたる人々を社会的、法的、経済的にサポートする仕組みを作り上げるのが今回の主題であるべきだ。スポーツを報道するマスメディアの責任。

以上のような問題点を改善すべく、私たち国会議員は毎週のように議論を進めている。しかしながら、スポーツ新聞や雑誌、スポーツジャーナリストはこの動きにいったい興味を示さない。実は、こういったスポーツに関わるマスコミ、ジャーナリストの姿勢も、日本におけるスポーツの発展、地位向上を妨げているような気がしてならない。アスリートの活躍や試合結果はもちろん大切なニュースである。しかしその一方で、スポーツ新聞や雑誌、スポーツ番組、スポーツジャーナリストがこの議論のことを報道していくべきだと思う。いいゲーム、素晴らしいプレイを見るためには、社会的・財

政的・制度的な支援と、良い指導者、良い環境が必要不可欠。そのことをスポーツジャーナリストやマスメディアが理解し、社会に広めていくことが、スポーツの発展にもつながっていくはずなのだ。

今回、スポーツ振興法の改正は、大幅改正または新法制定になるとみられている。トップアスリートの育成とサポート、そしてスポーツを楽しむ裾野を広げることという二つのミッションを両輪に、熱意のある人たちが新しい挑戦や試みをしやすい社会的制度、枠組みを再構築していくつもりだ。スポーツの現場にいるもしくは現場に関わることを目指すSMR読者の皆さんは、スポーツを愛し、スポーツの発展を願う人たちだろう。だからこそ、スポーツ振興法の改正が議論されていること、約五〇年ぶりに、スポーツの地位を向上させるチャンスがきていることを知っていただき、この動きに積極的に関わっていただきたい。ぜひこの機会に、現場で起こっている問題点、改善提案、意見などがあれば、読者の方からも広く聞かせてほしい。そんな投書、メールなら大歓迎だ。これからの日本のスポーツを、一緒に盛り上げていくことはありませぬか。



すずき かん / 1964年兵庫県生まれ。82年道中・高卒。85年東京大学法学部卒。同年通商産業省(当時)入省。電子政策課統括課長補佐などを歴任した後、99年慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス環境情報学部助教授に転身。2000年、平尾誠二氏(神戸製鋼所)らとNPO法人「SCIS」(シックス)を設立。01年参議院議員選挙に民主党公認で、東京選挙区から立候補。初当選。05年9月「次の内閣」の文部科学大臣に就任。07年再選。現在、参議院文教科学委員会委員、参議院政治倫理選別制度委員長などを務める。